

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	戦国時代の四大文豪（其八）：論説
Author(s)	兒島，獻吉郎
Citation	龍南會雜誌， 1 1 0： 1 - 9
Issue date	1905-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5796">http://hdl.handle.net/2298/5796</a>
Right	

# 龍南會雜誌第百十號

## 論 說

### 戰國時代の四大文豪 其八

教授 兒島獻吉郎

#### 二十九 韓非の經歷

修業時代の韓非の經歷は李斯と俱に荀卿に師事し、李斯自ら韓非に如かずと謂ひしとの一事實の外は何等の消息を得る能はざるなり。而して成業後の韓非の經歷は不遇の二字を以て之を掩ふべきなり。韓非の慘礫少恩は吾之を取らず。韓非の過激にして鋒鋷を露はせるは吾之を取らず。韓非の鉤箝を事として欽恤明慎の意なきは吾之を取らず。韓非の刻核を主として忠厚誠悃の意なきは吾之を取らず。韓非の眼孔明達なれともしかも其德足らざるは吾之を取らず。韓非の氣鋒銳利なれともしかも其量褊狹なるは吾之を取らず。然れども韓非の學識を以て一生を不遇の二字より脱出すること能はざりしは千載の下、吾人一片の同情を彼に寄するもの多き所以なりき。彼は韓の公族なり。而して宗室の式微を視本國の衰頹を歎き。憤悲慷慨の餘、筆を驅りて韓王の爲めに經世の策を

講しぬ。孤憤五蠹説林説難等皆是れなり。然るに韓王終に彼を用ふる能はざりき。

韓王已に韓非を用ふる能はす。而して秦の始皇は彼の孤憤五蠹の書を見。大に其言を喜びて嗟乎寡人得見此人、與之游、死不恨矣と曰ひぬ。是れ實に韓非に取りての唯一の知己なり。秦急に韓を攻むるに及びて、韓王、韓非をして秦に使せしむ。始皇悦ひて韓非を留め。將に大に之を用ひんとす。是れ實に千歳一遇の好機會にして彼の技倆は正に此時に發揮せられ。彼の抱負は將に此國に實行せられんとす。然るに此属望は遂に水泡に歸して。彼は不幸にも同窓の學友李斯の爲めに譖せられ。剩さへ李斯の爲めに毒殺せられ。彼の抱負、彼の技倆は結局一世に實行せられずして。獄中に罪なくして死するに至りぬ。憐むべし絶世の材幹を以て、非命の死を遂げ。しかも同窓の友に陥れられて、あたら千歳一遇の好機會を逸するや。是れ吾人か彼の人と爲りに心服せすと雖も。彼の境遇に無限の感慨を寓して、熱淚を千秋の後に灑く所以ならずや。

### 三十 韓非の性質

韓非の性質は温良ならず。寛仁ならず。敦厚ならず。弘容ならず。圓滿ならず。濶達ならず。豪放ならず。君子風ならず。長者風ならずして。彼の人と爲りは鯁固なり。急激なり。敏捷なり。狷介なり。狹量なり。訥辯なり。廉直にして圭角あり。刻薄にして恩愛に乏し。是れ彼の才と學と識とを以て。終に一世の人に容れられず、愛せられず、敬せられざりし所以なり。彼が君臣の關係を論して臣は死力を盡くして君と市するものなり。君は爵祿を垂れて臣と市するものなりと曰ひしか如きは、已に彼の君子的人物に非ざるを證するに餘りあり。况や彼か人主にして大に其子を信すれば

姦臣たるもの其子に乗して私を成し。大に其妻を信すれば姦臣たるもの其妻に乗して私を成すか故に妻の近きも決して信すへからず。子の親しきも亦決して信すへからずと曰ふに於ては、彼の刻薄殘忍を證するに於て餘りあるに非ずや。蓋し彼は智的人にして、情的人に非ざるなり。彼は冷血男子にして熱淚の大夫に非ざるなり。蓋し彼の長所は才の多きに在りて、彼の短所は徳の足らざるに在るなり。

### 三十一 韓非の學説

國小にして大國の間に介まり。東に靡き西に従ひ。一定の國はなく。朝に地を裂きて秦の薦薦と爲り。夕に又旗を翻へして齊楚の扞蔽と爲るは是れ韓國の狀態なり。君優柔にして一定の主義なきこと繋かざるの舟の風に任せ波に漂ふか如く。内は姦臣の爲めに壅蔽せられ。外は説士の爲めに左右せらるゝは韓王の狀態なり。此の如きの國に生れ。此の如きの君を戴ける韓非、特に王と同宗の因縁ある韓非たるもの、何ぞ此狀態を坐視傍觀するに忍ひんや。必ず自ら奮ふて國權を擴張し、主權を伸長せんとす。是れ庸人と雖も猶然るべし。況や意氣嶙嶙の韓非に於てをや。是に於て彼は師説に反して極端の主權論を主張し。君主をして神聖ならしめ、秘密ならしめ、鬼神の端倪すへからざるが如くならしめ。群臣をして人主の意嚮を揣摩することなからしめ。百官をして賞罰の權柄を覬覦することなからしめんとし。法と術とを以て人主か臣下に對するの要訣と爲せり。彼の所謂法とは憲法律令の謂にして、之を官府に著はし、之を民心に銘して、法を愼むものに賞を施し、令を犯すものに罪を加ふるを言ふ。彼の所謂術とは權謀術數の謂にして、好を去り惡を去り、跡を掩ひ

端を匿くして、臣下の形名を參同するを言ふなり。故に性質上法は明にして顯を要すと雖も。術は陰にして密を要するなり。申不害は單に術の必要を知りて未だ法の必要を説かざるなり。公孫鞅は單に法の必要を知りて未だ術の必要を説かざるなり。而して韓非の學は即ち申子の術と公孫子の法とを兼取りて、之を全くし之を盡くせるものと謂ふべきなり。故に彼嘗て申不害と公孫鞅との二家の言孰か國に急なるかとの間に應じて曰はく、二家の優劣稱るへからず、今人食はさること十日なれば死せん、大寒の日に衣せざるも亦死せん、而して衣食孰か人に急なりと曰はゞ二者一を缺くへからずと對へんのみと。是れ彼が二家に取る所あるを知るへし。

抑彼が師家の學風に反して法術の必要を説くに至りし所以は一は韓國の形勢に激昂する所あるに由れり。一は韓王の態度に慊焉たらざるものあるに由れり。故に彼は儒者と墨者とに反對して。仁義惠愛の用ふるに足らざるを主張せりと雖も。慎到申不害公孫鞅の徒には大に賛同したりき。蓋し法術が當時の國家及君主に最も必要なるを信すればなり。

### 三十二 學術上彼と荀子との關係

彼は荀郷を師事しなから荀郷の學風に違反せるものあり。即ち彼が人主の道を論して道は見るへからざるに在り、用は知るへからざるに在りとて、極端の秘密主義を鼓吹せるは、全然荀子に反對せるものなり。見よ荀子は正論篇中に人主の秘密手段を駁して、主は民の唱なり、上は下の儀なり、唱默すれば民應することなく、儀隱なれば下動くことなしと曰へるに非すや。又其彊國篇中にも上は下の師なり下の上に和するは猶は響の聲に應じ影の形に像るか如しと曰へるに非すや。蓋し荀子は

人主の道を以て宣明に在り、端誠に在り、公正に在り、と爲し。韓非は人主の道を以て周密に在り、幽闇に在り、玄默に在りと爲せり。是れ氷炭相容れざるの説なり。顧ふに韓非亦師家の學風と主義との那邊に在るかを知らざるに非ず。然れども時勢と國勢との變に應じて師説に反するの止むを得ざるに至りぬ。是れ彼か師説に反するの第一なり。

又荀子は君道篇中に君人者勞於索之、而休於使人と曰へり。而して韓非は難桓公に於て人を索ること必ずしも勞ならず、人を使ふに於て必ずしも佚ならずと曰へり。是れ師説に反するの第二なり。然れども韓非の説亦荀子に原つく所なきに非ず。即ち荀子の所謂

夫尙賢使能、賞有功、罰有罪、非獨一人爲之也、彼先王之道也、一人之本也、善善惡惡之應也、彊國篇凡刑人之本、禁暴惡惡、且懲其未也、殺人者不死、而傷人者不刑、是謂惠暴而寬賊也、非惡惡也、正論篇凡爵列官職賞慶刑罰皆報也、以類相從者也、一物失稱、乱之端也、夫德不稱位、能不稱官、賞不當功、罰不當罪、不祥莫大焉 正論篇

の如きは則ち韓非の信賞必罰説の由りて出づる所ならずや。又荀子

天子無妻、告人無匹也、四海之内無客禮、告無適也、足能行、待相者然後進、口能言、待官人然後詔、不視而見、不聽而聰、不言而信、不慮而知、不動而功、告至備也、天子也者勢至重、形至佚、心至愉、志無所詘、形無所勞、尊無上矣、君子篇

の言の如きは韓非の法術論の由りて出づる所ならずや其他荀子の文章中の

凡説之難、以至高遇至卑、以至治接至乱、未可直至也、遠舉則病繆、近世則病備、善者於是聞也、

亦必遠舉而不繆、近世而不備、與時遷徙、與世偃仰、緩急贏絀、府然若渠堰驥枯之於已也、曲得所謂焉、然而不折傷非相篇

の如きは全く是れ韓非の説難篇の原本ならずや。

今人主有大患、使賢者爲之、則與不肖者規之、使智者慮之、則與愚者論之、使脩士行之、則與汗邪之人疑之、雖欲成立得乎哉、君道

の如きは韓非の孤憤篇中の

人主之左右不必智也、人於人有所智而聽之、固與左右論其言、是與愚人論智也、云々

の胚胎せるものに非ずや。其他韓非の姦劫弑臣の末段は荀卿か春申君に謝する所のものと同一なり。且韓非と李斯との政策は全く同一轍に出つる如し。韓非は之を前に言ひ。李斯は之を後に行へり。故に韓非をして若し秦王に用ひられしめんか、彼は必ず李斯と同じく火坑の悲劇を演せしならん。見よ韓非の五蠹篇中の明王之國無書簡之文、以法爲教、無先王之語、以吏爲師の語は李斯の詩書を燒かんことを請ふの書中に稱する所の有敢偶語詩書、棄市、以古非今者族、若欲有學法令、以吏爲師と符節を合するか如し。是れ皆荀卿の詩書を輕し、太古を重んぜざるに基けるものに非ずや。是に由りて之を觀れば韓非の學荀卿より出つることの甚たしく少からざるを知るに足るべきなり。

### 三十三 學術上彼と老子との關係

彼と老子との關係に就ては。史記に喜刑名法術之學、而其歸本于黃老と曰へり。然れども韓非の法を尙ひ術を主とし、仁義惠愛を薄しとし、嚴刑重罰を重んずるか如きは、決して老子の無爲無心の

主義に非ざるなり。而して司馬遷以後彼を以て黃老の流裔と爲すもの多し。蓋し道德經中に將欲歛之必固張之、將欲弱之、必固彊之、將欲廢之必固興之、將欲奪之必固與之。の語あり。又欲上人者必以其言下之、欲先人者必以其身後之の言あり。是れ韓非か人主の臣下に對するに詐略を用ふべきを説くと稍相類似せる所あるを以てなり。然れども道德經の意旨は決して權謀術數の言に非ずして、人と争はざるを主旨と爲せるものなり。則ち韓非の詐略を主張せると同一の談に非ず。孟子の所謂不以文害辭、不以辭害志、以意逆志、是爲得之は古文を讀むもの最も注意すべきものならずや。故に余は彼を以て黃老の學派と見做さんよりは、儒學の一變せしものと爲すの寧ろ適當なるを信す。然れども彼が嘗て道德經に研鑽を積みしことは疑を容るへからず。何となれば彼の性質の狷介と氣骨の鯁固とを以てして、しかも老子の下風に立ちて道德經の解釋に従事し、解老喻老の二篇を述ふれはなり。且揚榘の一篇は着意着筆宛然老子の口吻にして、五千餘言の遺響なり。若し揚榘篇中の一節を把りて之を道德經中に入るゝならは孰か能く其眞否を辨せんや。蓋し修業時代の彼か文辭の彫琢を事として、特に擬古文を作りて老子の筆意を襲ひしものならん。宜なるかな揚榘の一篇は彼の獨得の長所を發揮せる孤憤五蠹說難等に比して殆ど別手に出づるか如きなり。故に彼は黃老の流裔に非ずとするも、亦彼が嘗て大に老子に嗜好を向けしことありしを知るに足るへし。

#### 三十四 政事家としての韓非の資格

政事家としての韓非は識見足らざるに非ず。學力乏きに非ず。氣概足らざるに非ず。唯彼の口吃にして道説すること能はざりしは。政事家として彼の大きな缺点なり。故に彼の筆は能く彼の意見を



## 論

表明せりと雖も、彼の舌は彼の思想を吐露すること能はさりしなり。彼は文章に由りて秦王に眷戀せられしと雖も、未だ嘗て言語に由りて韓王に聽用せられさりしなり。彼の才幹は能く李斯をして瞠若たらしむと雖も、彼の辯論は到底李斯に頡頏すべくもあらず。想ふに政事家として一生を坎坷不遇に送りて、已に同宗の君に顧みられず、又同窓の友に陥れらるゝに至りしは固より他に其原因あるへしと雖も。彼か辯説に拙なるか如きも亦其一因なるへし。

## 三十五 文學者として韓非の技倆

彼の思想は甚だ深遠と謂ふへからず。彼の氣象は甚だ弘大と謂ふへからず。しかも彼の文章は精彩あり、活氣ありて。規律森嚴の中に萬丈の光焰あり。猶ほ涌き出づる泉、内に噴薄して外に横溢するの趣あり。故に彼の文は荀子のそれに比して豊腰の點に一籌を輸せりと雖も、雄健の點は眞かに彼をして三舍を避けしむ。彼の文は莊子のそれに比して廣大の規模を欠けりと雖も、奇峭の趣致に富めり。蓋し彼の筆致は莊荀二子よりも、寧ろ孟子に近し。たゞ彼の文は孟子ほどの面積なきも、其流反て急なるものあり。即ち彼の文は彼の性質の如く温藉の致に乏しくして搏激の趣に於て餘あるなり。見よ彼は能く人の未だ言はざる所を曲説し。又敢て人の言ふに忍ひずとする所を道破するを。即ち彼の文は能く人の骨髓を剝り、人の腹吐を抉り、人の心膽を破り、讀者をして悚然自ら畏れ、愴然自ら失せむ。且修辭上彼か好んで用ふる所のは假借的用法を以て正喻を混合するに在り。例へば

游説之士、孰不爲繒繳之説而徼倖其後五蠹

今以吾言爲宰虜、而可以聽用而振世 説雖

説者能無嬰人主之逆鱗則幾矣 同上

有道者之不僂也、特帝王之璞未獻耳 和氏

の類一々枚舉に遑あらざるなり

北史の李先の傳に魏帝召先、讀韓子連珠論二十二篇とあり蓋し韓非子中先づ其目を列して然る後に其解を著くるものあり、之を連珠と謂ふ。則ち連珠の體は韓非に始まれり。任昉の文章緣起に連珠は揚雄に始まれりと云ふは非なり。

彼れの文時に押韻を用ふるものあり。主道揚摧等是れなり。是れ尙書易老子等に倣ひて記誦に便ならしむるもののみ。明の張鼎文嘗て彼の文を評して三代以下の一家言、絶た氣力光焰ありと言ふもの最も其正鴻を得たるものと如し。(完結)

## 大八州國の詩的時代を追想して現代の

## 文藝に及ぶ

内田 虎六郎

慈相の靈光をそが頭上にたゞへて、神代に一の光明を投射し、巧に醇朴の民を附楯して渴仰憧憬の